

## かべのすきま

中西 翠

今日はお母さんが家におらん。

めっちゃめずらしいことなんやけど、友達とどっかいく、いうで一週間も前から鼻歌うたってた。お父さんは夜勤で今日は帰ってこへん。中学生のお姉ちゃんも待ってましたといわんばかりに、夕方から友達んちにいきよった。オールでホラー映画をみまくるんやと。おもしろそうやから連れていけ言うたんやけど、断られてしまった。

小学生の弟をおきざりにして、内緒でどっかいきよったって後でお母さんにちくったろ、言うたらおもしろいどっかされた。しかも、

「言うたらしばくぞ」

捨てざりふまではきよった。なんやねん、ぼくなんもしてへんのに。

お母さんが家におらん日なんてまずないから、お姉ちゃん

ちゃんを見習ってぼくもなんかしよう思てん。同じ組のチンマルとたけしに泊まりにこへんかって声かけてみてんけど、あかんかった。みんな忙しいねんて。ひまなんはぼくだけや。

てなわけで、今夜は家にぼくひとり。

小学五年生やし、男やし、一日だけやから、火の元と戸締まりだけ気つければどうってことないねん。おぼけとかも別にこわないし。

みんな楽しそうに過ごしてるわけやから、ぼくも楽しもう思てお菓子を買いこんだ。こづかいはたいて、ポテトチップスとか、うまい棒とか、コーラとか、買いまくった。

いつもやったら早く寝なさいとか言われて見られへんテレビを、王様になった気分してみた。チャンネルは全部ぼくのもんや。

でもな、ドラマはいつつもみてへんから展開がわからへん。夜中にやってるちよつとやらしいテレビは、期待はずれやった。水着の姉ちゃんでてたけど、ちよつとだけやった。大人が楽しんでてべらべらしゃべって、なにいうてるかわからへん。

チャンネルかえまくって、テレビみながら食べたスナック菓子がおいしかったくらいやな。

期待してたわりには、一人の夜はあつけないで終わってしもた。あんまりおもしろくない。今ごろお姉ちゃんもお母さんも友達ときゃきゃ言うてるんやろな。

夜の十二時ごろにふとんにはいってねた。

午前四時に目がさめた。

寝る前にコーラ飲みすぎて、おしっこがたまっとる。

おぼけがこわいわけじゃないねんけど、しばらくふとんの中で右をむいたり、左をむいたりしててん。

そのうち、がまんがでんようになつてきた。くらやみにも目がなれて、飲みっぱなしのコーラのペットボトルとか、テレビのリモコンのりんかくがはつきり見えてきた。

「ちよつとトイレ」

しゃーなしにふとんからはい出して、トイレにむかった。ねむいしだるい。体中がもわりとあたたかかった。

ぼくの部屋はあんまり片づけせえへんから、ゆかにプ

リントがちらばったり、服がちらばったりしてる。しかも、昨日の夜は一本十円で買えるスナック菓子を、いろんな味を買って片っ端から食べててん。好きなどこにすわって、好きなきに食べてた。あおのりとか、スナックのかげらとかがゆかにちらばって、歩いたら足のうらにじやりじやりする。

一回トイレにたったら、目がさえてしもた。

「ねられへん」

いらいらして、ティッシュペーパーの箱をなげた。かべにぶつかって、ぼこんで音がした。

しゃーないから、部屋の電気をつけた。

パッパッとかかすかな音がして、白い光が目に入った。まぶしいねん。目がなれるまでには少し時間があるから、めっちゃ目細めとった。こんな夜中にテレビもやってへんし、することないし、とりあえず冷蔵庫あけにいった。

なんもあらへん。

部屋にもどって、なげつけたティッシュペーパーの箱をひろいあげた。鼻の中でひらひらゆれてる鼻くそをこっそりとたかかってん。見たら、箱のかどがわずかにへこんどった。

かべをみたら、傷がついてた。

やばっ。

目を細めてみると、ぶらぁんって白い筋が一本たれさがってた。

なんやねん、これ。

指先ですじをひっぱって見た。びくともせえへん。めっちゃかたい。

かさぶたとか、ぼこっと盛り上がってたら気になるやん。あんな感じで気になってしめて、よせばいいのに筋をひっぱることに熱中してしめてん。指先に体中の力をいれて、しんちようにひっぱったら、ずずっと糸がぬけていった。くちぶえふきたくなるほど気持ちいい。

糸はかべがみにそって、下から上へはがれていった。一メートル五十センチくらいまでいくと、ぶつりと糸がされた。

指先にまとわりついた糸をゴミ箱にすてて、鼻くそほじりながら、ふとんにもどってん。

なんもすることあらへん。

ぼーっとしながら、飲みかけのコーラを飲んだ。

夜ってめっちゃ静か。

ごによごによと話し声が聞こえてきた。遠くのほうでわらい声っぽいのも聞こえてきた。

「こんな朝方からだれやねん」

時計をみたら、四時四十三分やった。

じっとして聞き耳をたててみた。うっすらと声が聞こ

えてきた。

「……さん、主人の……そんなこと……奥さんのほうでも……アハハハ」

おばさんが三、四人くらいでしゃべってるみたい。

「おばさんの朝帰りか、やるなあ」

しーんとした部屋の中でつぶやいて、お母さんちゃうやろな、思た。

声は窓の外から聞こえてきてるんやと思ってた。

「島田さん、だいじょうぶ？」

コーラをのみながら、どきっとした。

声があんまりにも近い。

「だいじょうぶ」

さっき糸をひっぱったところが、細いやみになっていた。ジッパーをおろしたように、ゆるやかにかべがしな

った。見てると、細かったやみがぱっくりと開いた。

くるぶしまでの灰色の短いくつ下をはいた太い足が、によっきりかべからあらわれた。地面に足をつくると、体がずばっとでてきた。思わず頭に「だいこんあし」っていう言葉がかんたわ。

「やっつでれたわ」

ふう、とため息ついたんは、体格のいいおばちゃんや

った。かくれるのは無理やけど、ふとんの中にもぐりこんだ

わ。戸締まりちゃんとしてんのに、まさかかべのすきまから人がでてくるなんて思わへんやん。

おばちゃんは細いやみにむかって言ってるん。

「奥山さん、はよ出といで。その袋もったるから」

こわごわって感じで、つま先がかべからでてきた。

「ひゃあ！ 島田さんみたいに足ながないから、地面に足つかへんわあ」

「なに言うてんのんな」

おばちゃんたちは、ハスキーな声でひゃいひゃいとわらった。

「あとは柏原さん」と

まるまる太ったおばちゃんが三人。会話を聞いて、三人を確認していった。

島田さんはでっかいミッキーマウスのプリント柄ティーシャツを着て、紫色のスパッツに、灰色の短いくつ下。奥山さんはラーメンみたいな細かいパーマあてて、ハワイ土産のムーミーにくるぶしまでの白いくつ下。柏原さんは首に黄色のスカーフ巻いてるけど、全身黒タイツみたいな格好。もちろんくつ下もまっ黒。

「よっこらしょ」

ふとんのすき間からのぞいたら、ビニール袋からせんべいとか酢こんぶをとりだして、テーブルの上にならべてる。

「ひゃあ！」

島田さんがぼくをみつけた。

「あんた、ここに住んでる人？」

ぼくは首をふった。あんまりにもびっくりして、声がでえへんねん。

「おじゃましてます。奥山、いいますねん」

「柏原ですう」

「島田ですう」

島田さんがぼくのうでをつかんでふとんからひっぱりだした。

「とりあえず、すわり」

奥山さんが手持ちのすいとうから、コップにお茶をそそいだ。

「えんりよせんと飲んでや」

「あ、ありがとう」

とりあえず、お礼を言った。

「ぼく、アメちゃんあげよか」

柏原さんがどっからともなく黄金糖をだしてきて、ぼくにひとつ渡した。

「おばちゃんな、このアメちゃんめっちゃ好きやねん」

目くららさせながら言われてもこまるわ。食べたないのに、食べない悪いみたいやん。つつみ紙をひらけて、しゃーなしに黄金糖を口に入れた。

「な。おいしいやろ？ ぼく、一人なん？」  
「うん」

ぼくの家のやのに、おばちゃんが三人もおったら、きゅうくつっていうか、いづらくなってでていきたくなるねん。

「ほっそいなあ。なに食べてるん」

島田さんがぼくのをでつかんで、二人にみせた。

「ほんまやわ。そやけど、最近の子は細い子多いで」

「ぼく、ラーメンばかり食べてるんちゃうの？ あかんで、そんなしとったら」

島田さんがまゆ毛の間にしわをよせた。

「うちとこの上の子な、東京で一人暮らししてんねんけど、どうしよう、細なって帰ってきたら」

奥山さんが心配顔で言う。

「だいじょうぶやわ、おたくの子は。彼女おるやん」

柏原さんがやりと目でわらった。

「あかん、あの彼女は。ぶさいくな上に、なんもしよらへん」

奥山さんは手をひらひらつとふった。

「ネイルアートの凝っててな、手あれる言うて、家事まったくしよらへんねん。うちの子もたいした男ちゃうけど、なんぼなんでもあの彼女はあかんでえ。つめみがくより、顔みがけっちゅーねん。アッハハ。あんまり言う

たらおこられるしな、言われへん」

「そら奥さん、言うたらあかんわ。ハハハハハ」

奥山さんは遠い目をしながら、酔こんぶをかじった。

「ぼく、えんりよせんと食べてや」

おばちゃんがぼくに酔こんぶを一枚わたしてきた。べつに食べたなかったけど、しゃーなしに食べた。なんでか、ぼくは正座しとった。

ドンドンッ

ちよっとびっくりした。となりの部屋からかべをたたく音がしてん。

となりの家の人を起こしてしまったみたいやねん。ぼくはあんまりしゃべってないから、おばちゃんらの声がうるさかったんやと思っへん。

「せやけどやで、あんたとこのだんな、もうじき定年やろ。ずうっと家におったらどないする？」

おばちゃんらは人んちやと思て、なんも気にせんとしやべってんねん。ちよっとはらはらしながらみとってんけどな。

ドンドンッ

かべがなった。

「おい、うるさいぞ」

かべをへだてた向こうから、くぐもった声が聞こえてきた。

おーこわ。

「あの、となりの家のひと、おこってるねん」

ぼくはおばちゃんたちに言うてみた。

「焼き肉屋のうらのスパーあるやん。あそこの店長とパートの人ができてるんやで。この前もなかよく牛乳いっしょにはこんどつたらしいで」

「やらしいわあ。あの、ひげの生えたおっさんやろ」

ぜんぜん聞いてへん。

「あの、ほんまに、静かにしてほしいねんけど」

酔こんぶとか黄金糖もらっただけに、ちよっと言いにくいわ。ぼくの言葉はバリバリッとせんべいを食べる音にかき消された。

「このおせんべいおいしいわ。どこで買いはったん？」

「焼き肉屋のうらのスパーやで」

「いくら？」

「二百九十八円」

「やっすう。こんだけはいって、にいきゅっぱは安いわあ」

言ったとたんまたかべがなった。

「なんか、ドンドンいうてるなあ。かみなりなってるんやろか」

奥山さんが耳をすませた。

「雨の音せえへんから、かみなりだけちゃう？」

ちやうわ、となりのひとが怒つとるねん。

「あの、おばちゃんら、だれなん」

いいかげんイライラしたわ。ぼくがちらかすんはいいけど、みずしらずのおばちゃんらがちらかすのんは腹立つ。だれが片づけるねん。

おばちゃんたちは机の上にまんじゅうやらおかきやらを広げて、コップに牛乳をついどった。勝手に冷蔵庫あけんなよ。それ、うちの牛乳。

「さっき言うたやん。奥から、島田さん、奥山さん、私が柏原ですう」

おばちゃんたちはにこやかにわらっているけど、めっちゃずうずうしい。

「そういう意味じゃなくて、なんで勝手にうちんちにきたんかってこと」

おこりながら言うたからか、島田さんが下唇をつきだしながら言った

「最近の若い子はわけわからへん。こうやってすぐおこるやろ。うちの娘といっしょやわ。カルシウムがたりへんのやと思っ」

「わかるー、うちの子も反抗期ちゃうかとおもうわ」

せんべいのかけらがそここにちらばとった。ぜんぜん話し聞いてくれへん。

「いいかげんにしてや」

ぼくはどなった。

しーんとしたあと、かべのすきまをのぞいていた奥山さんがぼつと言った。

「奥さん、またすきまがあいてるで。ぼくちゃんおこつてるし、むこう行ってみたいへん？」

「そやねえ。行ってみよか」

ぞろぞろとおぼちゃんがたちあがった。

電話が鳴った。

「ぼく、電話やでえ」

柏原さんが言った。

わかっとるつ。すぐそばにおるんやから、聞こえてるつちゅーねん。

「夜中におそれいります。なにわ警察ですが、苦情の通報があります」

ぼくが電話にでているあいだ、おぼちゃんたちは大声でしゃべりながら、ひとりずつかべのすきまにはいつていった。

「あたしがもつたるから、奥さんさきいき」

「ほな、行くわ。忘れもんないやろな」

「私はおしり重いからなかなかあがらへん。三人も産んだたくましいおしりやからな。ハハハハッ」

おぼちゃんの声にはらはらする。

「あの、かべからおぼちゃん三人がでてきてさわいどっ

たんです」

小さい声で警察に言った。

「は？」

警察の人の反応は正しいと思う。

「あ、いえ。すいません」

やっぱり言うのんやめた。ぼくがおかしいみたいに見えるやん。なんでかしらん、警察の人にあやまってる、最後のひとり柏原さんがさけぶように言った。

「ぼくちゃんおおきに。牛乳もろてくなあ」

なんやねん。勝手に家のもん持ってくなつちゅーねん。家の中が一気に静かになった。ちよつとさびしいくらいに。

警察からの電話をきった。

火の元とか戸締まりとか、大事やと思うねんけど、かべから人があらわれたらどうしたらいいん。お母さん、今までそんなこと言うたことなかった。

ていうか、お母さん、ちゃんと玄関からでていったよな。まさか、かべのすきまからどっか行ってるんちゃうろか。